

CAN-DOと英文法指導を結び付ける教材づくりの試み

西 垣 知佳子¹⁾

¹⁾千葉大学・教育学部

An attempt to link grammar teaching with CAN-DO descriptors to create English teaching material

NISHIGAKI Chikako¹⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University

グローバル化が加速する現代社会のニーズを受け、日本の英語教育では、生徒の英語力を向上させ、具体的成果へと導くことが急務となっている。2013年に文部科学省から「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」が公表された。それを受け、全国の学校でCAN-DOリストの作成が進められてきた。CAN-DOとは、「学習者が実際に英語を用いて何ができるのか」という言語能力を記述した文のことである。今日の外国語学習の目的は、語彙や文法の知識を習得することではなく、身に付けた知識を使って何ができるようになるかということである。一方、CAN-DOに基づく授業においても、コミュニケーションを支える文法知識の獲得は不可欠であり、授業では、CAN-DOと文法指導の両者を組み入れる必要がある。しかし実際には「能力」を記述したCAN-DOと、文法の「知識」は異なる次元のものであり、両者の結び付けには工夫が必要である。そうした英語教育の現状に鑑み、本稿ではCAN-DOと文法指導を結び付ける方法を考察し、教材づくりの例を示した。

To correspond to the globalization of Japanese society, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) has been working to enhance English education in Japan. In 2013, MEXT released a guide to establish attainment goals for EFL learners as real language users. Since then, all Japanese high schools and junior high schools have created their own CAN-DO lists for their students. Although CAN-DO is rooted in action-oriented approaches, English textbooks in Japan are based on a grammar syllabus. Because of the gap between the two, CAN-DO is not utilized effectively in Japanese pedagogical contexts. In this paper, the implementation of CAN-DO in English classrooms where English is taught using a grammar syllabus will be discussed. This paper will show examples of English instructions in which CAN-DO and grammar syllabus are combined and English is taught effectively to achieve communicative purposes.

キーワード：できること (CAN-DO) 言語能力記述文 (CAN-DO descriptors)
英文法指導 (English grammar teaching)

1. 研究背景

グローバル化の進展が加速する今日、英語運用力の獲得は多様な分野において重要課題となっている。日本の英語教育では、生徒の英語運用力向上に関して、具体的成果をあげるために、「CAN-DOリスト」と呼ばれる学習到達目標のもとで英語指導が行われるようになっている。

CAN-DOとは、「学習者が実際に英語を用いて何ができるのか (CAN-DO)」を具体的に記述した文のことである。CAN-DOは、「～することができる」という表現を用いて記されている。このCAN-DO文を「言語能力記述文」、「ディスクリプタ (can-do descriptors)」と言い、その記述文を集めたものをCAN-DOリストと呼ぶ (本多, 2015)。

日本におけるCAN-DOは、2011年に文部科学省から

公表された「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」にはじまる。その中で、中・高等学校では、各学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標をCAN-DOリストの形で具体的に設定することが提案された。その後、2013年には文部科学省から「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」が公表され、各学校でCAN-DOリストの作成が進められた。

2. CAN-DOの背景としてのCEFR

日本の英語教育においてCAN-DOが認知されるようになった背景として、欧州評議会 (Council of Europe) が2001年に作成したCEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment, 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠) の活用が世界的に広がっていることがあげられる。

CEFRとは、欧州評議会が3言語政策に基づき欧州の

連絡先著者：西垣知佳子 gaki@faculty.chiba-u.jp
Corresponding Author :
NISHIGAKI Chikako gaki@faculty.chiba-u.jp

市民は母語のほか2言語を使えるようにすることを打ち出し、それらを欧州全域で適用させるために策定したもので、言語に共通な参照枠である。CEFRは、言語コミュニケーション能力を大きく3つのレベルに分け、A：初級（基礎段階の言語使用者）、B：中級（自立した言語使用者）、C：上級（熟達した言語使用者）とし、さらにそれらを2つに分けて、レベルが低いほうから順にA1、A2、B1、B2、C1、C2の6レベルに分類した。そしてこれらの6つのレベルについて、全般的な外国語力（付録参照）、さらに、「聞くこと」「話すこと（やり取り、発表）」「読むこと」「書くこと」の4技能5領域それぞれについて、実際に何ができるレベルかをCAN-DO記述文で示している（投野編，2013）。

例えば外国語力全般について、最も低いレベルであるA1では、次のように述べられている。

具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け舟を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

吉島・大橋他（訳・編）（2004：25）

ケドル（2013）は、CAN-DOの原点であるCEFRが学校の外国語教育にもたらす変化として、次のような点を指摘している。

1）場面と機能の重視

CEFRは場面と機能中心の言語使用を重視している。このことからCAN-DOを利用することによって教師は、教室の中に実社会を取り入れることができる。

2）学習者の中間言語（interlanguage）の重視

CEFRの全レベルを通して強調されているのは、ある言語を使って「何とか切り抜けること」である。一般に、教師が学習者の言語運用能力を評価するときは、母語話者の正確で完璧な規範を基準にして測定しがちである。その点、能力記述文で示されるCAN-DOは、ある段階の学習者の「不完全な」言語運用を失敗と見なすのではなく、むしろ適切と認めるものである。そのため、学習者は言語を運用することを励まされる。

3）スピーキング・スキルの重視

一般的に、外国語の指導においてはリーディングとライティングを重視する傾向があるが、CEFRはスピーキングとリスニングを重視している。このことで、学習者は効果的な言語使用者になる。

4）文構造の軽い扱い

CEFRは文法を用いて達成する内容を重視しているため、CAN-DOリストでは使用すべき文構造を定めていない。なかでも自己評価用のCAN-DOリストは、かなり意図的に文法と文構造に言及しておらず、タスク達成の一部という程度である。

以上の1）～4）から、CEFRでは、言語に関する知識だけを取り出して教育するのではなく、言語を使用す

る活動をとおして、「話すこと」を中心としたコミュニケーション能力を養成していくという理念が貫かれていることがわかる。

3. CAN-DOリストへの期待と現状

日本ではCAN-DOリストの導入に対して、どのようなことが期待されているのか、また現状はどのようなになっているのかについて検討する。

3.1 CAN-DOリストへの期待

文部科学省は、グローバル化時代の進展にあわせて、英語教育改革を推し進めており、学習指導要領の改訂のたびに、生徒のコミュニケーション能力育成のための授業改善を求めてきた。しかし、今でも文法訳読中心の授業や入学試験対策のための授業が行われていることも少なくない。グローバル人材の育成が急務となっている今日、現代社会のニーズに応えるためには抜本的に英語教育を変えなければならないという気運が高まっている。

次期学習指導要領の実施にあたり注目されているのがCAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定である。児童・生徒が授業を通して語彙・文法を身に付け、「それを使って何ができるのか」という視点で目標を設定することで、指導のあり方を見直す。教師は児童・生徒が設定した目標をできるようにするために、教科書の題材を用いて、何をどのように教えればよいのかを考えることになる（投野，2016a）。

「外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定に関する検討会議」（文部科学省，2012）によると、日本の英語教育において、学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で設定することにより、次の利点があるという。

1）学習指導要領の内容を踏まえた指導方法や評価方法の工夫・改善が容易になる。

2）各学校が、学習指導要領の目標を地域の実態や生徒の能力に応じて具体的な目標に設定し直すことにより、すべての子どもたちの英語力の水準向上に資するだけでなく、グローバル社会に通用するより高度な英語力の習得を目指すことが可能となる。

3）小・中・高が連携した英語教育を考えるにあたり、小・中・高等学校で一貫性のある学習到達目標を作成することの実現が可能となる。

以上のように、学習者が「言葉を使って何ができるのか」という視点で学習到達目標を設定することで、英語の学習指導のあり方を見直すことができると期待されている。

3.2 CAN-DOリストの現状と課題

「平成28年度英語教育実施状況調査」（文部科学省，2017年）の結果によると、高等学校では88.1%の学科が、中学校では75.2%の学校が「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標を設定している。一方、その達成状況を把握している割合は、高等学校では41.6%の学科、中学校では34.2%の学校にとどまっている。以上の調査結果から、

CAN-DOリストは作ったものの、活用されているとは限らないという現状が見えてくる。

この現状に対して投野（2017）は、その理由の1つとして、CAN-DOを活用するために、CAN-DOをどのような言語材料と結びつけたらいいかわからない場合があると指摘している。CAN-DOは「言葉を使って何ができるのか」という能力を記述するもので、CAN-DO自体は英語の語彙や文法については何も示していない。そのため、授業の中で言語活動を設定してCAN-DOを達成させるためには、目標とするCAN-DOに適した語彙や文法を教師が見定め、それをCAN-DOと結び付けて活動を行う必要がある。例えば、「未来のことを予測し言える」というCAN-DOに対して、それを達成するためにはbe going to... やwillに関する文法事項と結びつけて指導することになる。

3.3 CAN-DOと文法項目の結び付け

次期学習指導要領に対する中央教育審議会の答申（文部科学省、2016）では、『外国語』等における小・中・高等学校を通じた国の領域別の目標（イメージ）たたき台」として、CEFRに基づいて、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の4技能5領域それぞれについて目標が示された。例えば「話すこと（やり取り）」のA2レベル（おおよそ中学2年生から3年生をカバーするレベル）では、次のように目標が示されている。

A2レベルの目標

- 日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやりとりをすることができるようにする。
- 身近な話題や興味関心のある事柄について、ある程度準備をすれば、会話に参加することができるようにする。
- 身近な話題について、簡単な英語を用いて簡単な意見交換をすることができるようにする。

これらの領域ごとのレベル別の目標は、指導者が目指すべき、小学校・中学校・高等学校それぞれの大きな目標であって、広範囲の能力を網羅する能力記述文となっている。

そこで、実際にこれらの目標を日々の指導に活用するには、各学年、各学期、各単元、各Lessonと、より細かい到達目標であるCAN-DOへと落とし込んで行く作業が求められるのである。

4. 研究目的

日本の英語教育では、CAN-DOに基づく学習到達目標の設定が進みつつある。そうした中、児童・生徒の英語運用力の育成を図るために、毎回の授業で使うCAN-DOを、学習文法項目と結び付けて設定する作業が必要である。そこで、本研究の目的を以下のものとした。

毎回の授業で扱えるような、教師にとって身近で、細かいレベルのCAN-DOを、文法項目と結びつけて設定する教材づくりの一例を報告する。

5. CAN-DOと文法学習の結び付け

英語の学習と言うと、中学や高校では、「不定詞の用法」「関係代名詞の用法」などの英語の文法を学ぶことという印象がある。しかし本来、学習者にとって大切なことは、例えば、「相手に提案できる」「レストランで注文をできる」「週末の予定を話すことができる」など、習得した文法知識を使って、実生活の中で「できること」を身に付けることと言えよう。社会のグローバル化が加速する今日、英語教育が目指すところは、CAN-DOを身に付け、それを蓄積し、増やしていくことであると考える。こうした目標達成のために、本節では、英文法学習とCAN-DOを結び付ける方法を考える。

5.1 文法力があるとはどういうことか

文法学習について論じるために、はじめに「文法力がある」「文法が身に付いている」とはどういう状態であるか考える。Larsen-Freeman（2014）は、文法力をform（形式）、meaning（意味）、use（使用）の3つの要素から構成されると考え、円グラフを使って示した（図1）。formは発音・語彙・スペリング・文法等の言語の「形式」、meaningは伝える内容、すなわち「意味」、useはどのような場面で・いつ・何のためにそれを「使用」するかということである。これらはひとつでも欠けると実際の言語運用では役に立たない。以上を踏まえると、文法学習はこれら3つの要素のネットワークを学習者の頭の中に構築することであると言える。

ところが、実際の日本の英語授業では、入試問題を解いたり、高度な英文を日本語に訳したりといった「形式」の学習が重視され、「使用」に注意が向けられることはあまりなかった。しかし、CAN-DOを設定することで、「英語を使ってできること」が意識されるようになり、英語の「使用」を目指して3つの要素を結び付ける文法指導が行われることが期待される。その結果、伝えたい内容（意味）を大切にして、コンテキスト（場面・状況）の中で英語を「使用」しながら、文法（形式）に注意を向けさせつつ、CAN-DOを身に付ける英語の指導が期待される。

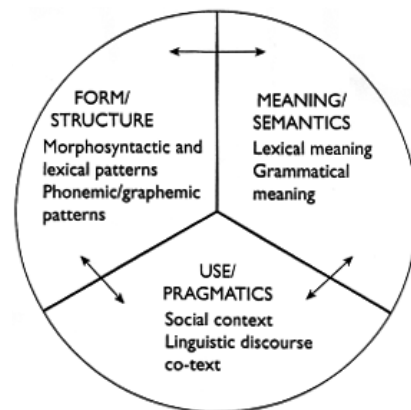


図1 文法力の3要素
Larsen-Freeman (2014, p.258) より

5.2 「伝えたいこと」とCAN-DOを結ぶ文法知識

図2は、英語を使ったコミュニケーションのプロセスを示している。相手に伝えたい気持ちや考えなどがあるとき、英語学習者は自分の持つ語彙知識と文法知識を総動員して伝えたいことを表現して、相手に伝える。伝えたいことは、自ら沸き起こる場合もあれば、授業のなかで練習や課題として与えられる場合もある。図2が示すように、英語学習の目標は、語彙や文法の知識を身につけることにとどまるのではなく、それを使って「伝えたいことを表現する」そして「伝えることができる」ようになることである。それはすなわち、CAN-DOを達成することである。

以下では、図2の中の文法知識に絞って、教室での文法指導の方法について考察していく。文法指導の方法は、いくつかのタイプに分けられることから、どのような方法があるか整理する。



図2 伝えたいこと、語彙と文法の知識、表現することの関係

1) 1本釣り型文法指導

1つ目の文法指導の方法は、新出の文法項目を指導する場合である。例えば、「過去にしたことを伝えたい」とき、動詞の過去形に関する知識が必要である。そこで、「英語では動詞の形を変えることで、過去のことを言っているのか、現在のことを言っているのか区別する」「過去のことを表すときは、動詞の過去形を使う」ということをはじめて指導する場合である。学習者は過去形という新しい文法知識を獲得して、その結果、過去に行ったこと、すでに終わってしまった過去のできごと、過去の状態などについて表現できるようになる。すなわちCAN-DOを身に付けた状態にいたる。

新出文法項目は、教科書では、基本文（ターゲットセンテンス、ベーシックダイアログ、ポイントなどとも呼ばれる）の形で、注意を向けるように明示されているので、「1本釣り型文法指導」と呼ぶことにする（図3）。この場合、英語の規則に関する知識を学び、ドリル練習などを行うことから、学習指導要領における「知識・技能」を育成するための指導と言える。



図3 1本釣り型文法指導

2) メガネ型文法指導

中学校の英語教科書で、上述のように基本文という形で示される新出文法事項であるが、小学校で外国語が必

修化されると、その学び方は変化するであろう。それは、従来は中学校で新出文法事項として扱われてきた文法項目が、すでに小学校の外国語と外国語活動をとおして、経験したり、触れたり、発表活動などで使われたりしてきていることがあるためである。

先日、文部科学省より、次期学習指導要領実施までの移行措置期間（2018年度と2019年度）に使用される英語テキスト*We Can*とその指導書が公表された。それらによると、中学1年生は、小学校で実に多彩な英語に触れたり、使ったりしてくることがわかる。*We Can*に掲載されている英文と、それに含まれる文法項目の例を下に示した。

I can run fast. 助動詞（能力）

May I have ten? 助動詞（許可）

Frogs live in the pond. 動詞＋前置詞句

I ate sandwiches. 不規則動詞の過去形、名詞の複数

I enjoyed playing soccer. 規則動詞の過去形と動名詞

I usually jog with my dog around the pond.

頻度を表す副詞、前置詞句

I want to be a teacher. to不定詞、be動詞の原形

People want to see the nine pines at the shrine.

to不定詞、前置詞句

上記の英文には、耳をとおして触れるだけではなく、友だちとのやり取りや発表活動に使われる英文も含まれている。小学校では文法を明示的に学ばないので、これらの英語表現は、単語や文構造などが分析されることなく、ひとつのまとまり（unanalyzed whole）としてまるごと児童の頭に入っている。まるごと覚えているので、この段階では、英文の一部を変えて、新しく文を生成したりすることはまだできない。その後、中学校で英文法を学習して、文法知識を身に付けると、文の一部を入れ替えるという文操作ができるようになる。そして、“I want to be a teacher.”を応用して、“Mami wants to be a singer.”や“My father wanted to be a baseball player.”などの表現ができるようになる。

生徒にとってこのタイプの学びは、焦点が合わないためにぼんやりと眺めていた英語という風景が、「文法知識」というメガネをかけたとたんにはっきりと見えるようになったというような状況である。このタイプの指導では、文法指導がメガネの役割を果たしていることから、「メガネ型文法指導」と呼ぶことにする（図4）。



図4 メガネ型文法指導

3) 細胞分裂型文法指導

次のタイプの文法指導は、既習の文法事項に対して、知識が加わることによって、それまでに築かれた文法知識が変容して新しい形が生まれる場合である。例えば助動詞canに対して、はじめにI can run fast.（速く走

ることができます」という「能力」の意味を学び、そこから発展して、I can help you. (あなたをお手伝いできます)」という「申し出」に応用して使えるようになる場合である。同様に、相手の「能力」をたずねるCan you run fast? (速く走ることができますか) から広がって、Can you help me? (助けてもらえますか) という「依頼」の働きを身に付ける場合である。これらの場合は、既習の文法知識を応用して他のCAN-DOへと転換してCAN-DOを増やしていくことから、「細胞分裂型文法指導」と呼ぶことにする(図5)。

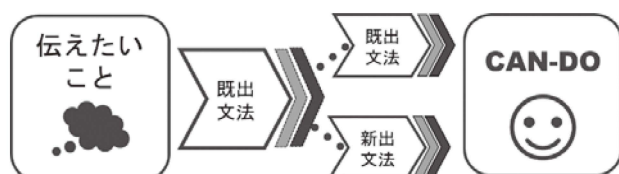


図5 細胞分裂型文法指導

4) ソムリエ型文法指導

その他の文法指導の方法として、「伝えたいこと」に対して、場面・状況、話し相手に合わせて、それを伝えるためにどんな文法項目を選ぶかを学習者に自由に選ばせるタイプの指導がある(図6)。教科書によって呼び方はいろいろあるが、学期の終わりなどに既習事項を活用して行うMy ProjectやPresentationなどの指導がこれにあたる。例えば「友だちをテニスに誘う」と言うときに、中学3年生であれば、それまでに学習した次のようないろいろな表現から相手や状況に応じて選んで使うことができる。

Let's play tennis.
Shall we play tennis?
Why don't you play tennis with me?
How about playing tennis with me?
I want to play tennis with you.
Do you want to play tennis with me?
Would you like to play tennis with me?
If you have time, I would like to play tennis with you.

上の例では、英語を習い始めの頃は「テニスをしよう」と直接的で単純な言い方をしていたものが、学年の進行とともにCAN-DOが増え、より高度な大人の英語表現を場面に応じて選んで使えるようになる。この場合、コミュニケーションの目的を達成するために、どのような表現、言い回しをするのかを自分で考えて、選定して、伝えていくことから、学習指導要領における「思考力、判断力、表現力」に関わる資質・能力を育成するものである。また相手に配慮して表現を選びコミュニケーションを図ることで、「人間性の涵養」も期待できる。

このタイプは、自分の持ち合わせの文法知識の中から適切なものを選んで表現することから、「ソムリエ型文法指導」と呼ぶことにする(図6)。

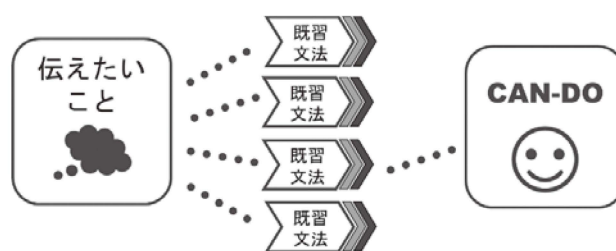


図6 ソムリエ型文法指導

5.3 「やり取りCAN-DO」の設定

英語力のレベルを表す世界的指標であるCEFRでは、4技能5領域(聞くこと・読むこと・話すこと(やり取り)・話すこと(発表)・書くこと)のそれぞれについて、CAN-DOが設けられている。同様に、次期学習指導要領の実施にあたりでは、CEFRを基準にした目標が4技能5領域について、小・中・高をとおして示されている。

投野(2017)によると、5領域のうち、文法項目にCAN-DOを貼り付けて指導しやすいのは発信技能であり、とくに、「話すこと(やり取り)」はCEFRにおいても段階別にかなり多くの機能表現がリストされている。

このことを踏まえ、次の第6節では、5領域の中でも文法項目と結び付けやすい「話すこと(やり取り)」についてCAN-DOを設定し、CAN-DOを基盤にした文法指導について検討する。その際、「能力」を記述したCAN-DOと文法の「知識」の両者は異なる次元のものであり、結び付けには工夫が必要である。本稿では、「話すこと(やり取り)」に結び付けられたCAN-DOをとくに「やり取りCAN-DO」と呼ぶ。

6. CAN-DOと文法知識を結び付ける教材作り

本節では、CAN-DOと文法知識を結びつけた実際の教材づくりの例を紹介する。ここでは、NHKラジオ「基礎英語2」を例にして、実際の教材に言及しつつ、その作成方法について述べる。これは、平成28年4月から現在まで、筆者が講師として番組に出演し、教材の作成と月刊テキストの執筆を行っているNHKの語学番組である。

6.1 NHKラジオ「基礎英語」シリーズ

NHKの語学番組は、CEFRを土台にした「英語グランドデザイン」に基づき、英語学習番組を体系的に提供している。すべての番組は、CAN-DOを指標にした独自の7段階のレベルに分類して配置されている。「基礎英語」はシリーズになっている番組で、「基礎英語1」「基礎英語2」「基礎英語3」があり、それぞれが中学1年生、2年生、3年生の英語学習に対応していて、NHKの語学講座の中でも歴史が長く、伝統的な番組である。

NHKの語学講座には多様な番組がある中、「基礎英語シリーズ」は、「基礎英語3」の番組講師である東京外国語大学の投野由紀夫氏が策定した「基礎英語CAN-DOリスト」(投野, 2016b)に基づいて、それぞれの番組担当講師が自分の番組を作成している。

筆者が担当する「基礎英語2」は、「NHK英語グランドデザイン」のレベル設定によるとA1レベルにあたる。A1は、「日常生活の基本的な表現を理解し、ごく簡単

なやり取りができる」レベルである（基礎英語2，2017年4月号）。

6.2 「基礎英語2」の教材づくり

中学2年生は、学習する文法項目が多く、これらは基礎力として確実に身に付けさせたい事項である。はじめに番組で扱う文法項目を選定した。選定には、まず、英語検定教科書の採択率の1位から3位まで（占有率80%以上）の検定教科書が扱っている文法項目を抽出し、それをもとに中学2年生に学ばせたい文法事項88項目を選定した。88という数字は、「基礎英語2」で扱うLessonの数である。

次に、その文法項目を身に付けたら「できること（CAN-DO）」を考え、88個の文法項目に対応するCAN-DOを「基礎英語CAN-DOリスト」から選び、各LessonごとにCAN-DOとして設定した。例えば、否定疑問文を学習するLessonでは「基礎英語CAN-DOリスト」から「驚きや意外な気持ちを言える」というCAN-DOを選んで付した。こうして文法項目とCAN-DOを1対1で結び付けた。これら88個のCAN-DOには、繰り返し出てくるものがあったり、リストにはないものは筆者があらたにCAN-DOを作成したりした。

次に、抽出されたCAN-DOが現れるストーリー性のある会話を作成した。ストーリーは中学2年生が主人公で、主人公と友だちが友情を深めながら、それぞれの夢を追

い、挫折しながらも成長していくもので、CAN-DOと文法項目を念頭に置いて作成した。ストーリーは会話で構成されていることから、「基礎英語2」のCAN-DOは「話すこと（やり取り）」ができるようになることを目指して設定した「やり取りCAN-DO」である。

各Lessonでは、新出文法項目を会話のやり取りの中で学んでいく。文法項目は、「1本釣り型文法指導」、「めがね型文法指導」あるいは「細胞分裂型文法指導」のいずれかの方法で扱われた。

6.3 「基礎英語2」で設定したCAN-DOの例

「基礎英語2」で設定したCAN-DOの例として、表2には、2017年度に扱った文法項目の中から、to不定詞と動名詞を選んでリストにした。表2は、今日のCAN-DO（左列）、CAN-DOを表しているCAN-DOセンテンス（中央）、CAN-DOに結び付けられた文法項目（右列）を示している。例えば「to不定詞の名詞的用法」のうち、「目的語として働くto不定詞」を指導する場合、“I want to go cycling with you.”と言うCAN-DOセンテンスが会話の中に出てくる。そこでこのCAN-DOセンテンスは、「人を誘ったり、人の誘いに応じたりできる」というCAN-DOと結び付けられた。（ここでは、go cyclingの[go+...ing]は既習表現である。）

このLessonでは、I+want+[to+動詞の原形]...+with youという形を使うと、「親しい人を何かに誘うこ

表2 to不定詞と動名詞に結び付けられたCAN-DO

Today's CAN-DO	CAN-DOセンテンス	文法項目
人を誘ったり、人の誘いに応じたりできる	I want to go cycling with you.	不定詞の名詞的用法：目的語の働き
挑戦していることを言うことができる	I'm trying to plan my club's summer camp.	不定詞の名詞的用法：目的語の働き
義務・必要について言える	You need to practice hard.	不定詞の名詞的用法：目的語の働き
計画・夢・希望について言える	My dream is to write a book about great athletes.	不定詞の名詞的用法：補語の働き
動作や行為の目的を言える	We got up early to do research.	不定詞の副詞的用法：目的
目的をたずねたり、答えたりできる	Why did you become a teacher? To spend time at school.	不定詞の副詞的用法：目的
人・もの・ことに情報を加えて言える	The newspaper needs new stories to cover.	不定詞の形容詞的用法
ある不特定のものに情報を加えて言える	I want something to read at home.	不定詞の形容詞的用法
好き・嫌いについて言える	Finally, you started loving judo.	動名詞：目的語の働き
趣味・特技について言える	Practicing the tea ceremony is my hobby.	動名詞：主語の働き
趣味や熱中していることについて言える	My new passion is writing.	動名詞：補語の働き
趣味・特技について言える	You're good at doing research.	動名詞：前置詞+動名詞

表3 接続詞と結び付けられたCAN-DO

Today's CAN-DO	CAN-DOセンテンス	接続詞
自分の言うことを例や理由をあげて具体的に話すことができる	I opened the door because he was watching from outside.	because
1日の生活や日課について話すことができる	When Naoko practices judo, I join her.	when
条件をつけてものごとをいうことができる	If you go back to the shrine, you will find them.	if
感想や考えを話すことができる	I think that trains are a fantastic way to travel.	that
知っていることを言える	I know that the population suddenly increased	that
理由を挙げて具体的に話すことができる	Since you're here, let's talk about our plan.	since
順序だてて話すことができる	After you left, we met.	after
身のまわりで起こるできごとなどについて言える	While you were here, you did such great work.	while

とができる」というCAN-DOを学ぶ。そしてto不定詞は初出なので、[to+動詞の原形]を不定詞と言うこと、[want+to+動詞の原形]で「～したい」という意味になることなどもあわせて学ぶ。次の日には、「挑戦していることを言える」というCAN-DOを設定して[try+不定詞]の形を学び、to不定詞の名詞的用法のうち、目的語として働くto不定詞について、別の例を学ぶ。

表3には同様に、番組で扱った接続詞(右列)とそれらと結び付けられた今日のCAN-DO(左列)、CAN-DOを表しているCAN-DOセンテンス(中央列)を示した。2行目に示した「時を表すwhen」は、「1日の生活や日課について話すことができる」というCAN-DOと結び付けられた。このCAN-DOは中学1年生では、I play tennis every day. のplayのような「動詞の現在形」を学習するときに結びづけられるCAN-DOである。中学2年生では、whenと結び付けることで、同じCAN-DOに対して発展的な表現を学ぶことができる。

6.4 日々の授業に使えるCAN-DOとCAN-DOリスト

「基礎英語2」の教材づくりでは、「基礎英語CAN-DOリスト」が存在していた。このCAN-DOリストは、日々の授業で使えるような細かいレベルで記述されているリストである。そのうえで、それに結び付けるようにして「基礎英語2」の各LessonのCAN-DOを設定した。一方、検定教科書を使って指導する通常の英語授業では、依拠する細かいレベルのCAN-DOリストは存在しないであろう。そこで、例えば、投野由紀夫研究室が作成してネット上で公開している「CEFR-Jを活用するための‘Can Do’ Descriptor リスト」(投野, 2012)を利用したり、それを参考にして、独自のCAN-DOリストを作成したりして利用することができる。

また、日々のCAN-DOや各LessonのCAN-DOは、単発的、単独に作られるものではない。各学年、各学期、各単元へと降りて設定されるものである。また、日々のCAN-DOから振り返って、各単元、各学期、各学年のCAN-DOが修正されていくこともある。このようにCAN-DOにはレベルがあり、トップダウン、ボトムアップの双方向で支え合うものであると考える。

7. 生徒に身近でリアルな「やり取りCAN-DO」

CAN-DOを目指して、form-meaning-useの3者を結び付けて指導するには、「場面設定」が重要である。教師はターゲットとなる文法事項を児童・生徒に身近で、リアルで、そして、興味を持てるような場面・状況の中で提示したり、練習させたり、活用させたりする必要がある。本節ではCAN-DOと文法指導を結び付けるために不可欠である「場面設定」について考察する。ここでは、現在進行形、be動詞、助動詞canの指導を例にして検討する。

7.1 現在進行形の場面設定

生徒の生活に身近でリアルなCAN-DOを「現在進行形」を例にして考える。「現在進行形」の学習では、「今していることを伝えることができる」というCAN-DOが

設定されることが多い。しかし、実生活においては、バスケットボールをしている話者が、自分が今している行動を、“I’m playing basketball.”とわざわざ発言する場面は考えづらい。目の前にいる相手にとって、話者が今していることは一目瞭然であり、わざわざ言葉にして言う必要はないからである。

そのことを考えると、教室の中でよくある活動として、カードを引いて、それに書かれている動作を、例えばバスケットボールをしているジェスチャーをしながら“I’m playing basketball.”と言う活動は、文のパターンを身に付けるドリルとしては有効であるが、CAN-DOの観点からすると、使用(use)つまり、どんな場面で現在進行形を使うのかはわからない。

そこで、教材づくりには実生活で自分が今していることを相手に伝えるのはどんな場面かを考える。例えば、“I’m doing my homework now.”というターゲット文があるとすると、次のような場面が思い浮かぶであろう。ターゲット文:I’m doing my homework now.

- ・別の部屋にいる家族に、今自分がしていることを伝えるとき。
- ・電話で相手に、今自分がしていることを伝えるとき。
- ・「手伝って」と頼まれて手が離せないので断るとき。
- ・兄弟や友だちに「遊ぼう」と誘われて断るとき。

このような場面を考えて活動をつくと、次のようになるであろう。

■友だちに「遊ぼう」と誘われました。あなたは忙しいので、理由を言って断ってみましょう。

下線部を変えてペアで会話してみましょう。

：Taro, let’s play shogi.

：Sorry, but I can’t. I’m studying now.

7.2 be動詞の場面設定

次にbe動詞を例にして考える。be動詞と結び付けられるCAN-DOは、「自分や相手、家族や友だちについて話すことができる」となるであろう。そして、“I am a student.”のように一人称単数を主語にして“I am + 名詞”の形を指導する場合、「自己紹介」という場面設定がよくある。次に、三人称単数が主語の場合は、“Tomomi is a junior high school student.”のように、「家族や友だちを紹介する」という場面が考えられる。

一方、二人称を主語に置く“You are a student.”は場面設定が難しい。相手に対して「あなたは学生です。」と、わざわざ言う状況は想定しづらいからである。そこで、できるだけ必然性があり、児童・生徒が興味を持てるような場面を考えて、“You are + 名詞”の形を指導する場合を考えると、次のような場面設定が考えられる。

- ・あなたは、文化祭の出し物の演劇の監督で、配役を決めるとき。
- ・あなたは魔法使いで、友だちに魔法をかけて、変身させるとき。

活動では、場面、状況を設定して、下線部分に言葉を入れて言う。英語がわからない場合は、辞書で調べさせる。

■あなたはクラスで行う劇の監督です。友だちの配役を決めましょう。下線部分を自由に変えて言ってみましょう。

: 友だちの名前, you are 役 柄 !

You are...を自然な場面設定の中で導入するのは難しいが、検定教科書では次のようなやり取りがされている。

Yuki: Hi, I am Yuki.

Mike: Oh, you're Yuki. I'm Mike.

Sunshine English Course 1 より

マイクは、ユキにはじめて会ったのだが、ユキのことは以前から聞いて知っていたという状況である。マイクの言葉の文頭に「Oh」と置くことで、「あ～、あのユキさん!」という状況が生まれ、You're Yuki が自然な形で導入されている。

さらに、筆者の授業で大学生に、「“You are a junior high school student.”を使うのは、どのような場面が考えられますか」とたずねたところ、「あなた中学生でしょう! しっかりしなさい。」と親が子どもの姿勢を正すとき、また、「さすが、中学生ですね!」と年下の人からほめられるときなどの状況も出てきた。このように学習したターゲット文や文法項目が、学んだこと以外にどのような場面で使えるか考えることは、外国語の学習をとおして思考力を育むことにつながると考える。

7.3 「能力」をあらわす助動詞 can の場面設定

能力を表す助動詞canを導入する場合、「自分ができることを相手に伝えられる」というCAN-DOが考えられる。しかし、日本人の特性として、「わたしは～ができます」と自分の能力を相手や公衆に対してわざわざ言う場面は多くない。そこで、「I can + 動詞の原形...」の形を使って、自分ができることを相手に伝える場面を考えることになるが、例えば次のような場面を設定して活動ができるであろう。

■あなたは生徒会に立候補します。自分が学校や友だちのためにできることを言って、投票してもらえるようにアピールしてみましょう。

■クラスで係を決めます。自分ができることを言ってみましょう。

■(高校生の場合) アルバイトの面接を受けます。面接官にあなたができることをアピールしてみましょう。

8. ま と め

外国語学習では、明示的な文法知識は不可欠である。一方、外国語学習の目的は文法知識の習得ではなく、それを使って何ができるようになるのかということであり、知識を行動へと引き上げる指導が必要である。また、CAN-DOを掲げる行動指向型の外国語学習では、文法へ意識を向かせることも大切である。これらの課題に取り組むための試みとして、本稿では、CAN-DOを達成するための文法指導の方法として、文法指導を「1本釣り型文法指導」、「メガネ型文法指導」、「細胞分裂型文法指導」、「ソムリエ型文法指導」の4つに分類した。そのう

えで、CAN-DOと文法指導を結び付ける方法を考察した。

英語の授業にCAN-DOを設定することで、英語の授業に変化がもたらされると、さらに評価の方法が変わることも期待される。従来の評価は、筆記試験に比重を置いていたが、CAN-DOの導入により、筆記試験に加えて、CAN-DOを評価するパフォーマンステストの導入も始まっている。テストの方式が変われば、学習者の英語の学び方も変わるので、文法学習を知識の獲得に終わらせず、その先にあるCAN-DOへと引き上げられることができる。今後は、現代の英語学習の目的を見すえ、パフォーマンス評価の割合が高くなっていくことであろう。

筆者は、語彙・文法の知識を育成するための新しい手法として、コーパスを活用するデータ駆動型学習(Data-Driven Learning: DDL)の方法を研究している。DDLは気づきを導く発見学習の手法をとり、記憶の定着、自律した学習者の育成に効果が高い(西垣, 2015, 2016, 2017)。しかし一方でDDLは、形式重視の指導であるため、実際場面で使える英語力に引き上げるには、DDLとパフォーマンスを抱き合わせる必要がある。そこで、今後はDDLとCAN-DOを組み合わせた指導を検討することで、コミュニケーション能力を支える文法指導、そして確かな文法力に支えられたコミュニケーション能力の育成について考えていきたい。

本研究では、「やり取り」に絞って文法項目とCAN-DOを結び付ける方法を場面設定の観点から検討したが、今後は、「聞くこと」「話すこと(発表)」「読むこと」「書くこと」との関係、さらには年間活動に位置付ける「やり取りCAN-DO」の導入方法、DDLに結び付いたCAN-DOについても検討していきたい。

謝 辞

本研究の一部は平成28-31年度科学研究費助成事業基盤(B)(16H03441研究代表者 西垣知佳子)の支援を受けて行われました。ここに感謝申し上げます。

引用文献

- 中央教育審議会(2016).「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)」。Retrieved October 3, 2017 from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
- 本多敏幸(2015).「中学校英語 CAN-DOリスト作成のための手引き」, 東京:教育出版。Retrieved September 20, 2017 from http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/docs/h28chugaku/eigo/pdf/candotebiki_Eng.pdf
- ケドル・スター・ジュリア(2013).「CEFRと中等学校用シラバス」, キース・モロウ(編)・和田 稔他(訳).『ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)から学ぶ英語教育』pp.64-79, 東京:研究社。
- Larsen-Freeman, D(2014). Teaching Grammar, in *Teaching English as a Second or Foreign Language*,

- Celce-Murcia, M, Brinton, D, M. and Snow, M.A. (Eds), Cambridge: Cambridge University Press, 256-270.
- 文部科学省 (2011). 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」.
Retrieved September 25, 2017 from
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm
- 文部科学省 (2012). 「外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定に関する検討会議の設置について」.
Retrieved September 28, 2017 from
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/08/attach/1324761.htm
- 文部科学省 (2013). 「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」.
Retrieved October 12, 2017 from
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332306.htm
- 文部科学省 (2017). 「平成28年度『英語教育実施状況調査』の結果について」.
Retrieved October 23, 2017 from
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1384230.htm
- NHKテキスト (2017). 『基礎英語2』4月号, 東京: NHK 出版.
- 西垣知佳子・小山義徳・神谷昇・尾崎さおり・西坂高志・横田梓 (2015). 「フォーカス・オン・フォーム」に取り入れるデータ駆動型学習の効果の検証』『英語授業研究学会紀要』24, 50-63.
- 西垣知佳子・中條清美・小山義徳・神谷昇・安部朋世 (2016). 「運用力と文法力を育む英語授業—コミュニケーション教授法とデータ駆動型学習—」『千葉大学教育学部研究紀要』64, 349-355.
- 西垣知佳子・中條清美・神谷昇・小山義徳・安部朋世・物井尚子・横田梓 (2017). 「データ駆動型の英語語彙・文法学習支援ウェブサイトの構築」『千葉大学教育学部研究紀要』65, 365-373.
- 投野由紀夫研究室 (2012). 「CEFR-Jを活用するための‘Can Do’ Descriptor リスト」.
Retrieved October 16, 2017 from
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/092/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2012/09/24/1325972_2_3.pdf
- 投野由紀夫編 (2013). 『CAN-DOリスト作成・活用英語到達度指標CEFR-Jガイドブック』東京: 大修館書店.
- 投野由紀夫 (2016a). 「CAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定と評価」『英語情報』春号, 4-7.
- 投野由紀夫 (2016b). 「『基礎英語』シリーズ・グラウンドデザインと新CAN-DO」『英語教育』65(1), 36-37.
- 投野由紀夫 (2017). 「言語材料とのリンクが広げるCAN-DOの可能性」『英語教育』Vol.66, No.10, 28-30.
- 吉島茂・大橋理枝他 (訳・編) (2004). 『外国語教育〈2〉外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』東京: 朝日出版社.

付 録 言語共通参照レベル

熟達した言語使用者	C 2	聞いたり, 読んだりしたほぼすべてのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ, 根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に, 流暢かつ正確に自己表現ができ, 非常に複雑な状況までも細かい意味の違い, 区別を表現できる。
	C 1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ, 含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに, 流暢にまた自然に自己表現ができる。社会的, 学問的, 職業上の目的に応じた, 柔軟な, しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確で, しっかりした構成の, 詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現, 結束表現などの用法をマスターしていることがうかがえる。
自立した言語使用者	B 2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて, 抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで英語の母語話者とやり取りができるくらい流暢かつ自然である。かなり広範な範囲の話題について, 明確で詳細なテキストを作ることができ, さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。
	B 1	仕事, 学校, 職場で普段出会うような身近な話題について, 標準的な話し方であれば主要点を理解できる。その言葉が話されている地域への旅行をしているときに起こりそうな, たいいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について, 単純な方法で結びつけられた, 脈絡のあるテキストを作ることができる。経験, 出来事, 夢, 希望, 野心を説明し, 意見や計画の理由, 説明を短く述べるができる。
基礎段階の言語使用者	A 2	ごく基本的な個人的情報や家庭情報, 買い物, 近所, 仕事など, 直接的関係のある領域に関する, よく使われる文や表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら, 身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や, 直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。
	A 1	具体的な欲求を満足させるための, よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し, 用いることもできる。自分や他人を紹介することができ, どこに住んでいるか, 誰と知り合いか, 持ち物などの個人的情報について, 質問をしたり, 答えたりできる。もし, 相手がゆっくり, はっきりと話して, 助け舟を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

吉島茂・大橋理枝他 (訳・編) (2004: 25) より